

西周の歴史哲学と戦争・平和思想

目次

- 1 「恒久平和」と、戦争による諸国併呑の歴史
- 2 「天翁」の方略としての紛争戦乱とその手段
- 3 東アジア、とくにわが国の当面する形勢
- 4 わが国の国是は何か
- 5 戦争的自然・人間観、その一
- 6 戦争的自然・人間観、その二

岩
崎
允
胤

西周は、明治十年代の初めに、兵賦すなわち兵の取り立て(『徴兵』)を本題として陸軍の将校を前に断続三ヶ年にわたって講演をした。それを論文としてまとめたのが、ここでとりあげる「兵賦論」である。その前半では、——日本の当時の国際的諸条件のもとで——徴兵論の前提として、軍備が絶対に必要であるという主張を根拠づけるために、独自の歴史哲学と、戦争・平和論とを展開しており、——今日からみてその論の賛否はさておくとして——幕末以来西洋の歴史学や哲学を急速に導入してきた当時のわが国における、世界とその歴史にかんするかれの視野とユニークな思想とをここから知ることができる。

* 欧米の列強に伍してゆこうというわが国の明治前期におけるこの啓蒙的な哲学者に積極的な反戦・平和の思想を期待しても、それは無理なことであろう。

1 「恒久平和」と、戦争による諸国併呑の歴史

西周は「兵ノ竟ニ罷ムベキヤ否ヤ」と問うている。これはまさに経世の根本問題で、「恒久平和」(eternal peace)、かれの用語でいえば「四海共和・無疆(『境』)治休」にかんする問題である。カントの名はとくに論稿中に出てはこないが、かれが、かの有名な著作「恒久平和のために」を念頭において、大問題にかれなりにたち向かっているのは明らかである。ともあれ西は、世界の歴史が窮極の目的としてついに無疆治休の域に至るべきことを認めながら、そこまでの長期にわたる現実の過程では戦争激化の道を辿ることの避けられない所を説くのである。いわく、「此四海共和無疆治休ト云フハコノ世界ノ達スベキ結果ニシテ、必ず斯ニ馴致ス〔しだいに至る〕ベキコトハ、是ヲ過去ノ史乘(歴史の記録)、世界ノ往時ニ徴シテ歴々日ヲ観ルガ如キモノアリ。今ノヲ約略シテ〔かいつまんで〕説クニハ、須ラク分ハ併ニ終リ、離ハ合ニ至リ、小ハ大ニ呑レ、弱ハ強ニ併

セラルト云フ一理ノ流行（この一理が歴史をとおしておこなわれること）ニシテ、何ノ代何ノ時ヲ論ゼズコノ理ノ流行ニアラザルハナシ」（Ⅲの二二ページ）と。西周によれば、この四海共和・無疆治休の域にいたるのは「小ハ大ニ吞レ」「弱ハ強ニ併セラル」といういわば弱肉強食の理による戦争激化の道を経たのち、すなわち早くてもはるか一万年の先のことであるとされる。

西はこのように述べるにとどまらず、「天翁」（天のあるじ）とその「意」「智略」という考えを導入して、かれの歴史哲学、戦争・平和論をまとめあげようとする。しかし、これは体系を組織立てるために頭のなかでこしらえあげた借り物の道具のようにみえる。かれは書く、「今歴史上ノ觀察ヲ究ムル時ハ、天道（天の理）ナリト云フベキカ、理勢（自然の成りゆき）ナリト云フベキカ、或ハ上帝（天帝）ノ意ト云フベキカ、或ハ造物主（ヨーロッパの神学・哲学でいわれるデーミュルゴス）ノ機関ト云フベキカ、……其ノ（前述の）一理ノ流行スル源因ニ至リテハ、吾人ノ曾テ知り得ザルトコロナレドモ、姑はラク之ヲ上帝ト名ケ、天翁ト名クルニ非レバ、言語上ニ於テ不都合ナル故ニ、此一理ノ流行ヲ促ガスモノヲ名ケテ天翁ト称スルナリ。然シテコノ天翁ナルモノハ、其大目的ナル四海共和無疆治休ト云フ場合（局面）ニ達セントスルニ、時々刻々此紛争戦乱ト云フ方略ヲ用キラルルコト」云々（Ⅲの二五ページ）。このようにして、歴史上の諸展開は結局すべて、不可知なものとされる天翁の「意」、「智略」のもとにおこなわれることになる。人間はそこではなんら能動的に関与するすべをもたない。それゆえ、西においては、恒久平和に向かつての人民の平和努力の積み重ねという思想も出てきやうがない。カントにあつては、また今日のわれわれにあつても、恒久平和は、それをめざして努力すべき実践の目標であり、崇高な理念である。しかし、西にはこのような積極的な思想は欠けることとならざらえない。かれ自身、もしこれを欠けば「言語上ニオイテ不都合ナル故ニ」その名を掲げるところの、かの「天翁」には、思想のもつ生きた力がない。ヘーゲルのいう「理性の巧智」の魅力もみられない。このことは、せつか

く「恒久平和」を掲げながら、その実践的に核心的な意義の全き欠落となっている。それゆえ、さきにわたくしは西周が「恒久平和」の大問題にたち向かっていると書いたものの、じつは、かれがいちおう人類の行手に「太平ノ休光〔麗しい光〕ニ浴スル時刻」(Ⅲの二四ページ)を示しておきながら、残念なことに、そのことの実質的な意義はきわめて乏しいものとなっているのである(後述)。そして、ただますます激しく戦乱をくりかえすことが、歴史の醜い巷で人間の負うべき「運命」とされることになる。「天翁」は西の頭脳において構成された絡繰かくりり以上のものではない。

* 西周は、むろん戦乱の世を喜んではいない。反対に面白くないと思っている。かれは書く、「故ニ、吾人ノ運ハ、吾ガ一万年後ノ子孫ノタメニ無疆治休ノ幸福ヲ与フルタメ、……(めいめいごく短い)生涯ヲ以テカノ併合、吞併ト云フ面白カラザル事業ニ服從セザルヲ得ザルコトニ極マリタリ、然レドモ是吾人ノ運命、吾人ノ役前〔担うべき役割〕ニシテ、之ヲ道みちレント欲スルモ道ルベキ道ナシ、必ズ斯ニ従事セザルヲ得ザルノ仕事ナリ」(Ⅲの二四ページ)。西は、この役割を自分の意に反するとも思う。しかし、かれは、これがこの世に生きる人間の担うべき必然の運命であると、表面をもってその諦念を語るのである。——西洋の古代哲学を研究してきたわたくしには、ここで、シシリー島の哲学者エンペドクレスの遺した断片が想起される(エンペドクレスのこの思想は、かつてロマン・ロランが「エンペドクレス」と題する論稿でとりあげて論じている)。エンペドクレスは、必然の女神の定めた掟のもとに、争、戦乱、凶運のはてしなくつづく時代を生きる人間たちの担う重い痛苦を、切々と語っている。しかし、そうした悲惨の極みから、かれはまたかつて愛の支配した黄金時代を想い描く、やがてその時代がわれわれにめぐってくるにちがいないことを期待しながら^③。そういえば、西も、「現在ノ吾人ハ、無疆ノ治休ト云フ太平ノ休光ニ浴スル時刻(これは、ここでいわれているかぎり、愛の支配する黄金時代であろう)ニ至ルマデノ其ノ中間〔にある〕という。わたくしは、この文章を書いている西の脳裏にエンペドクレスの詩句が閃いたのかどうかを知るすべはないけれども、少なくとも——この平和の境にいたるプロセスはどうであれ——、ここで西とエンペドクレスとが思想的に似通っている面をもつことを想起するのである。西は、

エンペドクレスのような詩人哲学者ではなかったけれども——。なお、西の思想のヘラクレイストとの関連については後述する。

* * 西周自身が、天翁の機関、機軸、関板かんぱん（からくり）の用語を使っている。

2 「天翁」の方略としての紛争戦乱とその手段

この天翁は、その大目的である四海共和・無疆治休の域に達するために、いま述べたように時々刻々あちこちで紛争戦乱という方略を用いるのであるが、そのさまざまな方略のなかでもなかならず最も著しい具体的手段は何であろうか。西周はまず、以下のように、体力と智力との対立と相互関係とについて述べる。かれによれば、『中庸』のなかに孔子の言として、北方の強（強者の事）と南方の強（君子の道）との別が述べられているところをみれば、地球の赤道以北、すなわち、北半球における南北の両地域について体力の強と心力の強との区別がその頃すでに認識されていたと思えるが、これは、天翁が、この天地を造ったときに太陽を中心として自転する遊星を運行させ、地球には光熱の直射によって南北の両極と寒暖の差を生じさせたためである、とする。すなわち、かれによれば、この寒暖の差に応じて前述したような体力の強壯と心力の穎敏えいびん（すぐれてかしこい）との相違が生じてきたのであって、古昔の歴史をみてもその証拠は明らかで、事物の発明は赤道近傍の地方で多くおこなわれ、攻伐入寇ということは北方から起こることが多かったといえる。もともと、近年はかならずしもそうではなく、たとえばイギリス、オランダ、ドイツなどの寒地に多知の人が多く発明も多々なされているが、これも、考えてみれば、これらの地域の人々は、古い時代には漢の匈奴と同じように蒙昧であったものの、ローマの管轄に入ってからしだいに開化し、その後十字軍の遠征やアメリカ大陸の発見な

どを経て、諸国の交通が日に盛んになって、その結果、今日の文明を誇称する北方欧州諸国ができたのである。こうしたことは、北方の強壯な体力のうえに南方の知力が加わったものと思われ、べつに格別なことではない、という。

もともと体力と知力とは敵する面をもちながらも、決して相互に損傷するものではなく、かえって相互に助長しあうものである。いまもし天翁が狂暴な体力をこの地球からなくそうと思うならば、知力もけつしてそれだけで自立することはできず、衰えてしまわざるをえない。「故ニ凶暴ナル体力ハ即チ智力ヲ鼓舞スルノ器械ニシテ、天翁ノ四海共和無疆治休ノ域ニ致ス大目的ヲ達スルニハ、生民ヲシテカノ智力ヲ極メシムルニ在リト謂フコト、面シテ其智力ヲ極メシムルニハ必ず強暴ナル体力ヲ以テ二十四時間、間断ナク鼓舞スルト云フコト是皆天翁ノ機関タルコト知ルベシ」（Ⅲの二二六―二七ページ）という。

* 西周はしばしばこのように対立の視点で論をたてる。ここでは、対立は敵対の面をもちながらも損傷しあうものではなく、相助長するものとされる。以下こうした点について、*注で注意してゆきたい。

西周はついで、東西諸国の情勢、とくにかれのオランダ遊学前後の頃からの西洋の国際情勢、その変遷を論じ、そこからさらに転じて、アジア東方諸国、そしていよいよ日本へと視点を向けるのである。

3 東方アジア、とくにわが国の当面する形勢

西周はいう、「總テ天下四海人ノ世ノ形勢ハ何ニ限ラズ颶風ニ似タルコト多シ」（Ⅲの三〇ページ）と。アジア東方の諸国は、当面のところ欧州に並立する同盟諸国とはかかわりをもたないようにみえるが、形勢の如何

によつては、早晚、欧州の南北両方のおこすいわば颶風内にまきこまれざるをえなくなるだろう。氣象学で、颶風のおこる原因については、大気のもつ内と外の力が激しくぶつかりあうことにある。すなわち、外圍の大気が内側の大気を包んでこれを一齐に内部に強く圧すると、弾力をもつ内側の大気はどこかに突出口を求めながら廻転をはじめ、廻転を重ねることによつていよいよ勢力を増し、ついに突破口ができる、そこからたちまち、いままで内気を包んでいた四傍の大気をもいっしょにひきつれて周囲の広い空間へと展転してゆく。このようにして颶風環ができて蔓延してゆくのであるが、比喩的にいって、およそ天下の人間世界の形勢にかんしても、このような具合である、と西はいう。

* 西周はここでも、対立する二力の激突をみている。かれは、太陽をめぐる惑星の運行についても求心力と遠心力（みかけの力）との対立を述べている。もっとも、これは求心力と慣性との対立とみるべきであろう。

日本の開化の状態を考へるに、欧州の開化がその領域内で十分な勢力をたくわえると、かならずどこかへと蔓延せざるをえないなどの勢いとなる。周囲に蔓延しようとしてもなかなか出所^{でとこ}がなく、近傍のトルコに及び、ペルシアに及び、インドに及び、安南に及び、シナに及び、そしてついに日本に及ぶことになる。なかでも日本にたいしては、暫時のあいだに開化風の当たりにはなほだ強く感じられる。それは、日本が開化の旋風の衝にあたるからである。つまりエジプトを越えて遠く東に向かうとどうしても結局はぶつからざるをえない衝に日本が位置しているからである。他の国々は土地が広大であったり、自国の教法が堅牢であったり、風俗が頑固であったりする。これに比べて日本は、自前^{じまえ}の開化がはなほだ少なく、あるにしても昔に他国から将来してきた開化であるからこれを捨てても惜しくはない、といった事情もあつて、ついに内気の稀薄なために開化の旋風線のはげしくあたる衝となつたしだいである。西周はこのように説明する。

ところで、自然界の大嵐とはちがって開化の颶風であれば、むしろ嘉いとすべきで、なんら憂うべきではないことであるが、そうともいえない重大な問題がある。それというのも、かれによれば、わが国が今日のような地位にいたったのはたしかに維新の功によるとはいえ、じつはこれはみな、かの天翁の機関内で意図されているところであって、人為人造ではない（このような視点は、人間の営為を一種の操り人形の仕草とみることになると、わたくしは思う）。そうである以上、いま開化の颶風線の衝に当たっている日本は、開化とは反対の、地球上の戦乱の颶風線にたいして、はたして免れることができるだろうか。内気がとうてい稠厚（厚くつまっている）ともみえないだけに、はたしてこの颶風線にあたらずにすむであろうか。戦乱が近づいているのかもしれない。西周はこのように、当時の明治の文明開化という時運を思い、この面から戦争と兵備の問題に論点を向けてゆく。まさに東方アジア、とくに日本にやがて吹きあれることになる激しい風運の予想である。いわく、「畢竟開化ト戦乱トハ相反スレドモ相消スルモノニハ非ズ、都テ相助長スルモノナリ。故ニ愈々開化ニ進メバ愈々戦乱ニ近ヨルノ理ニシテ、西洋各国トノ交際、年ヲ追ヒテ愈々親密ニ至レバ其ノ戦乱ニ与スルコトモ一層親密ニナラザルヲ得ズシテ、夫ノ土耳其亞弗業坦ノ颶風ハ当秋ハ何ノ辺ニテ起ルベキカ」(Ⅲの三三三ページ)、とかれはいう。

* 西周は、ここで開化と戦乱を、相消克するのではなく、相助長する対立とみている。

4 わが国是は何か

それではわが国是は何か。

この問題に以上の論議をしぼりこめば、次のように約言される。「一國ノ國是ハソノ國內部ヲ通シテソノ都合ニ因テ立ツノ國是ニハ非ズシテ、此地球ヲ擧リテ其都合ニ因テ立ツノ國是ナリ」（Ⅲの三三ページ）と。いまや地球、すなわち全世界にまたがる複雑な相互連関、時運の力関係のなかで一國の國是ははじめてきまるということである。西のいうように、たしかに、徳川長年にわたる「鎖國」の夢は今や木端微塵に粉碎されているのである。

わが歴世の記録に照らして國是が何であつたかをみるに、國是には、二種がある、と西周はいう。一つは、①内を治めて外を守るといふ國是、他は、②内を強くして外を侵すといふ國是であり、後者は、かつて神功や秀吉のとつたもの、また前者は、歴世が宗としてきたところであり、とくに北条氏と旧幕府徳川氏があげられる。この両極の間をとると、③兵法の道理となる。すなわち、よく攻める勢があつてはじめてよく守り、よく守る勢があつてよく攻めるといふわけである。そして、國是としては、①と②は、むしろ一方は他方を待つて相助けるものと考えるべきである。

①で極端なのは琉球藩主の主義で、兵備を撤（除去）して富厚を謀（はか）ることをもつてよしとする。しかし、これだと、本意に反しても、強い隣國の意に従わざるをえず、独立自主の人民に願わしいこととはいえない。このいわば軍廢國是と相反するのが、他方②のオロシヤ（＝ロシア）主義の併呑國是である。だがこれは、結局、地球上が一つに歸して初めて満足するといふもので、その時までただただ天翁の一機器となつて他を侵すばかりである。

では日本は何を國是とするか。(1)琉球國是をとるべきではない。前述したように、日本は東海の要衝にあたり、かの颯風のかならず吹き荒れる所である。「今万国ノ公法（國際法）恃ムベシト雖ドモ、其公法ヲシテ能ク其用ヲ為サシムル者ハ彈丸ノ力ニ非ザルナシ（軍の力に支えられてこそ公法を恃みとしようというのが実情である）」。

今修好ノ条規ハ頼ムベシト雖ドモ、其条規ニシテ能ク其ノ力ヲ維持セシムル者ハ独立ノ力ニ非ザルナシ、而シテ能ク此独立ヲ維持スル者ハ海陸軍ノ軍隊ニ非ザルハナシ「軍の力に支えられてこそ独立を保ちうる」といわざるをえない」(Ⅲの三五ページ、傍点筆者)。それでは、(2)オロシヤ主義はどうか。四点から考察するに、まず(i)土地の向脊、すなわち朝鮮・満州・カムチャッカ・シベリア・オロシヤ・また清国、さらに台湾、南洋諸国などが近隣で周囲にあるという地理的な配置からいって、とうていこの主義では政略上何の実利もえられない。(ii)知識の多寡からみてもまだあまりにもわが国は稚い、(iii)国力の貧富から考えても真の民力に欠けているといわざるをえない。さらに(iv)人民の風についていえば、これは本来一国の独立の基礎をなすと考えられるのであるが、わが国は一人ひとりが一国の毀誉得喪を自己の責務として担うようにはなっていない。したがって、わが国はオロシヤ主義もとれない。

それでは、わが国の今日の国是は何であるか。西周はここで、当時のわが国における最もすぐれた万国公法の学者たるにふさわしく、万国公法の正理にたちかえって考える。いわく、「抑も万国共ニ己ガ地疆(国土の境界)ヲ守リ、己ガ富厚ヲ謀リ、己ガ人民ヲシテ生ヲ養ヒ死ヲ喪シテ(悼み悲しむ)憾ミナカラシメ、苟モ他国ヲシテ我土地我財産我人民我權利ヲシテ干瀆(侵しけがすこと)セシメザレバ足ルト云フハ、即チ建国ノ大主腦(主眼点)ニシテ苟モ独立国ト称スル国ハ大邦小国ノ差別ナク通ジテ此大主義ヲ奉ズルハ万国公法ノ正理ニシテ、即チ人民社会ヲ成シ、国ヲ建テテ他ニ服属スルコトナキハ是即チ自然ニシテ具ハルノ權利ナリ、故ニ此ヲ道徳上ヨリ論ズルモ此ヲ公法上ヨリ論ズルモ間然ス(非難すべき欠点のある)可カラザルモノニシテ、何如ナル凶暴ナル者モ此ニ非ヲ打ツコトハ成ルマジキナリ。」それゆえ、外国人に貴国の国是はいかんと問われれば、「我國是ハ我土地、人民ノ權利ヲ保護シテ他國ノ侮慢ヲ受ケザルニアリ」(Ⅲの四〇ページ、傍点筆者、以下同じ)と答えなければならぬ。そこで、この国是を真に事実_{じじつ}に施してまきにあるべきようにするためには何が大切

であるか、との問いを西周は自らに掲げる。

いまかりに富者があるとしよう。かれがきびしい現実社会で生活をしつつ、その富を保有しつつけようとなれば、堅牢な土蔵をもつだけでは足らず、かれは、社会のなかで利を狙う人々に伍し、かれらと争って、機に乗じ変に応じ、宜しきを謀らなければならぬ。機変に應ずるの智略を働かさなければならぬ。この例から西は次のように論をすすめる。「一国ノ国はモ亦猶、此ノ如クニシテ、唯我疆土〔国土〕ヲ堅固ニ守ルノ上ニ在ラズシテ、我が疆土ヲ堅固ニ守ルガ上ニ機変ニ応ズルノ虞ナキヲ得ズ。……此機変ノ在ル所ヲ測量スル〔推し量る〕コトハ即チ本篇通篇〔兵賦論〕の全篇をとおして〕ノ大主腦〔主眼点〕ニシテ、我國是ノ因テ立ち我兵備ノ忽ニス可ラザルノ所以等將ニ此点ニ在ラントスルナリ」（Ⅲの四一ページ）。

* 虞は普通お、その意味であるが、西はここで虞えと読ませている（諸橋轍次『大漢和辞典』に虞備の用例がある）。

西周は、以上の所論をもとに天下地球の全領域にわたる大きな形勢を考え、万国は決して永久に現時の姿でそのままで存続するはずのものではなく、併呑に併呑をくりかえして、結局はどうしても、四海共和・無疆治休という窮極の目的に達すべきはずであるが、しかも、「是（恒久な平和の）目的ニ達スルノ度近クナレバ從ツテ戦争亦愈大ナル戦争トナルナリ。愈劇シキ戦争トナルハ是乃チ道理形勢ノ自然ナリ」（Ⅲの四三ページ）という。これが、西周の歴史哲学、そして、それと不可分な、平和と戦争の哲学の基本思想をなすといえよう。なおしばらく、われわれは、西のいう「天翁の智略」なるものをきこう。むろん「天翁」なるものは、前述したように、西周が絡繰として想定したものであるとしても、かれが「天翁」に仮託して考えた歴史進展の経理をそこから知ることができるであろう。「天翁」の智略は、施行するにあたってきわめて順序をえたものであると、西はいう。

まず初め、(1)地球上の人民がまだ無知で、東西南北を混和してゆくことなどを知らなかった時には、天翁は、俊傑な人物を生みだし、この者のうちに起動力として蚕食吞併あくなき大欲を燃やし、これを用いて東西南北の混和という目的を達した。これは兵事だけのことではなく、イスパニア、ポルトガルに東洋航路を開かせたのも、遠い異郷にある珍宝や奇品を求めさせたことに始まったのである。それゆえ、人民の開化がまだ進んでいなかったあいだは、多欲の人間ほど有為な事業をしとげるのであって、たとえば漢の武帝も、多欲であればこそ張騫を西域に遣わしたのであった。

しかし、(2)世の開化が進むにつれて、かならずしも多欲から戦争をおこすのではなくなり、むしろ形勢に迫られてやむをえず戦争に及ぶようになった。むろん欲心が消滅したわけではなく、かえって、その方向を転じてますます熾盛となったのである。十九世紀になると、地球上のことはだいたい明らかになったので、欲心の方向が転じて機器、すなわち蒸気車や蒸気船の発明から電気通信などにいたるまで諸般のことが競いおこって、昔日千里の外と想っていた遠隔の地も今日では数日ほどの行程ともなった。そのため、昔は荒廢の土地として顧みられなかった所も、今は相互の境界をはっきりさせ、所有にかなする権利と義務を明確に規定しなければならなくなった。こうして、万国ごとくおのが領土の境界を相互に画定する形勢となったのである。つまりは、欧州の知力の開化がようやく広く地球に影響して、今日のような事態に及んだのである。

ところで、一八四〇年には、清とイギリスとのあいだにいわゆるアヘン戦争がおこり、その結果、清は上海など五港を開き香港をイギリスに割譲した。それから数年ほどしてアメリカのビッドルが浦賀に來航して通商を求め、それ以来わが国は多くの艱難を経験しながら、植民地となることなく、ようやくヨーロッパの諸國にまじって一独立国となることのできたのである。

近年の歴史を顧みて、西周は、世の転変には、五十年で小変がおこり、百年で大変になる、という廻り合

せがあるとして、かりにこの数字で胸算用をすれば、今から八十八年内に（つまり明治百年にならぬうちに）大変がおこることになり、そのため、わが国は独立の権を失って他の管轄を受けるか、それとも、国境を拡げて他を管轄することになるか、この二者択一ということになると想定する。それゆえ今日から厄運を免れる計策をしつかりと立てておかなければならないと説く。兵備というものは一朝一夕で処置するわけにはいかないからである。明治十年代の始め、かれはこのような考えで真剣に兵備の急を説くのである。

以下、西周は兵備を厚くすることを説く。かれの論にたいして出されるさまざまな反対論を予想し、これへの反論を試みている（この問題にはわたくしは以下ではたちらない）。

* 西周のいう八十八年間に、日本は、日清、日露の戦争、韓国の併合、いわゆる十五年戦争など侵略行為をつぎつぎとおこし、結局、敗戦によって、全国土が連合国による進駐軍の管轄下におかれたのであった。

5 战争的な自然・人間観、その一

以上の所論を西周は要約し、戦争によって和睦の域（四海共和・無疆治休の域）に達せよという天翁の意のもとに、ひとは「否ニテモ応ニテモ戦争ヲ為サルヲ得ザルノ運命ニ中リ」、「此娑婆世界ハ内外トモ戦争ヲ以テ人世ノ定業ト定メタルニ相違ナシ」（Ⅲの五九ページ）という。そしてかれは、このことを一般化して、战争的（優勝劣敗的といってもいいかもしれない）自然・人間観ともいえるユニークな思想を述べる。もっとも、前述したように、そもそもかれは、人間がこのような運命にあるのを面白くは思っておらず、人間世界がいつの日か遠い先に無疆治休の域に達すれば、このような運命から人間ははじめて解放され（自由になって）、「共和」して生活することができるようになると、いちおう考えていると思われる。それゆえ、むしろこの域でこ

そ人間性が開花しうる条件が生まれることが期待されるはずであろう。しかし、このきびしい現世での人間の営為を「自造自為」とはみず、反対に操り人間のように考えているかれは、この面での実践的な意欲に欠け、したがって思想的な詰めにも乏しく、ここからかれの思想は、後述するような、いま述べた点にかんする、体系的な綻びはたひ、すなわちある種のひどい、致命的ともいえる破綻をみせるように思われる。

西周はまず人間社会にいかにも広く戦争がおこなわれているかを示す（もっとも、戦争の語は武力闘争以外の意味で、広義に用いられている、そしてついで自然界一般にまでこの語はおしひろげられる、十九世紀第四・四半期の説としては、はなはだ意外で模湖としたものであるが、わたくしは、すぐここで古代ギリシアの哲学者ヘラクレイストを連想してしまふ、このさいこの点についても後述する）。

かれは、一国内にみられる貴賤の別、貧富の別、知愚の別は「戦争贏輸えいしゆ（「勝敗」ノ別）であつて、だれも貴きを欲しないものはないが、運命に幸いせず、賤しい者は貴賤の戦争に輸ま（＝負）けたのである。貧富、知愚の別、みな戦争によって生ずる。それによって勝ち負けがうまれる。貧と愚は敗者というわけである。「中ニモ此智愚ト云フ者ハ凡テ人間ノ貴賤貧富ヲ生ズル根元ニシテ、愚者ヲ庄スル智力ヲ有スル者ハ常ニ貴トモナリ、富ヲモ得ル者ニシテ、總テ人間ノ世界ハ其戦争ノ方法コソ異ナレ、相争ヒ相戦フニ非ザルナシ。」もしこういう争いのない世界があるとすれば、それは寂滅世界だと、西はいう（かれの考えでは「四海共和」であろうに、なぜ「寂滅世界」なのであろう）。「吾人今日鴉鳴かあイテ起クルヨリ夜半ニ至リテ寐いルマデ、為ス所ノ事ハ一モ此貴賤貧富智愚等ノ戦争ノ為ニ、其軍需用品ヲ聚あつルカ然ラザレバ此戦争ニ従事スルカニ非ザルナシ。」たとえ一書生の勉強も「其学力ノ強弱ニ準ジテ優劣ト云フ勝敗（優勝劣敗）ヲ生ズル若キ、凡テ人間ノ万事万行ハ戦争ナラザルハナシ」（Ⅲの五九一六〇ページ）。陸軍の高官で、当時の高名な大学者たる西周のこの講演をききながら、軍人将校は、なるほどとその戦争観に合点したかもしれない。しかし、考えてみれば、西の描く優

勝劣敗の世は何とまた人間味の欠けた空しいものであろうか。

* 田口卯吉におけるように、人間社会の文明開化を財・貨・貨財の取得の観点からとらえる視点がここにはない。反対に知力優位の観念論的な優勝劣敗観が顕著である。

かれは、戦争をさらに広義に解し、人というものは戦争を好むの性が最もはなはだしく、楽しみも大半は戦争といえるところ（そして、はなはだ多義的な戦争観となる）。囲碁・将棋・玉突・双六・競馬・競艇はもとより、博奕・空米相場のときは、身をも家をも妻子をも惜しまない大戦争であるという。さらに閑淡（しずかに淡い境位をたのしむ）の遊戯にしても、戦争の意をもっていないと真味が少ないとし、詩歌連俳のような戯楽も、点取りをするにいたって生気がでるようにみえる、等々、その他、書画・演劇などにいたるまで、西はどうも事柄の本質をとらえずこうした末梢的な現象的なことの指摘に墮しているようにみえる。とにかく、ここから「人間ノ楽ミハ戦争ノ氣ヲ帯ビザレバ生氣ナク、興味ナキ事較然著明（あきらか著しい）ナリ。」このようにして、「人ト云フ者ハ縦ヒ兵革ノ戦争ヲ為サザルニモセヨ、終始戦争中ニ在リテ生活スル者」（Ⅲの六〇ページ）であると概括する。

* 三、四年前に「美妙学説」を書いた西周は、いま陸軍の将校向けに語るこのような芸術観をはたして本気にいっていたのだろうか。

そしてこの見方をぐっと拡げて、「凡テ吾人ノ住ム此太陽寰区（環区、つまり太陽系）ト云フ者ハ、畢竟戦争ヲ以テ構造セル者ト知ルベシ」と、次のように自然界へと論を及ぼす。西周は、今日みるように、物質の性は固結体（固体）、流動体（流体）、遊揚体（気体）の三体に分かれているが、もとは固結して一体をなしている、

静寂不動であったとする。そしてこの運動しない物質に、天工（造物主＝デーミュルゴス）が、いわば生氣、すなわち運動力をもたせようと欲して、太陽を掲げて熱という戦争具を賦与した。この熱によって静寂不動であった物質に擾動じやうどうがおり、この天地万物が形成されるにいたったというわけである。

* わたくしは運動する物質の見地をとる。外界の物質をそれ自身運動するものとして捉えるか、運動しないものとして捉えるかは、哲学の根本的な問題である。眼前の自然界は運動しているのであるから、もし物質を運動しないものとする見地を基本的な出発点とすれば、その物質に働きかけてリアルな運動をひきおこすところの、物質以外のものが存在しなければならぬ。それは非物質なもの、精神、神、等等ということにならざるをえない。客観的な観念論の基本シェーマがここに成立する。西周の「天翁」もこのたぐいである。わたくしの見地によれば、物質とその運動は不生不滅である。これは、「なにももの有らぬものから生じない」(ex nihilo nihilo)とも表現される。西周の場合には、最初に運動しない物質を想定し、「天翁」によって運動がひきおこされるとする。しかし、この観念論をいっそう徹底すれば、運動しない物質を最初に立てることも否定し（すなわち、いわゆる先在質料の否定）、神などの絶対者がいっさいを創造することになる。これがヨーロッパのキリスト教哲学で展開された「無からの創造」(creatio ex nihilo)の見地である。このような ex nihilo nihilo の見地と creatio ex nihilo の見地は基本対立である（以上の点については、岩崎・宮原将平『現在自然科学と唯物弁証法』大月書店、一九七二年、第一篇 II 「運動する物質」、とくにその 1 「物質と運動との不可分性」、その 2 「統一性・恒存性・無限性」を参照されたい）。わが国で「なにももの無からは生じない」の見地を江戸期に明確に主張したのは、貝原益軒、伊藤仁斎である。

なお、ローマの原子論哲学者ルクレティウスが『物の自然について』の第一巻の始めの方で「なにも有らぬものからは生じない」ということと「なにも有らぬものへと滅びない」ということを、自然にかんする二つの根本原則として述べていることは、唯物論の伝統を回顧するうえで特筆しておくべき事柄であろう。右の二つの命題中、前述の ex nihilo nihilo は前者のことであるが、これは簡潔な標語としていわれているのであって、実質的には後者をも当然にも含意している。

そして、酸・窒・水・炭などの基本的な物質（いわゆる諸元素）が強く熱せられ擾動されると気体となり、その度が乏しいと流体となり、熱度を感じること、そして擾動されることが少ないと固体となる（当時はまだ、原子の崩壊は認識されておらず、諸原子は不可分な基本粒子とみられていた）。こうして西周は書く、「此ノ如キ道理ニテ、熱ノ為ニ擾動セラレテ諸質諸物ノ変化ヲ生ジ、カノ三体ノ区別具ハリタル上ニテ、又熱度ノ一転ヨリシテ植物ヲ生ジ、又一転シテ動物ヲ生ジ、竟ニ人ヲ生ズルニ至リタリ。」このように、「天翁」のもと熱という戦争具によって静寂不動の物質に擾動がひきおこされ、もとは生命なき物質とその運動・発展から、植物・動物・人間までがつぎつぎと形成される。そして、そのさいにおこっている、始原的な（物質の）静寂体と（熱の）擾動力とのあいだの激しい戦争が火であるという。すなわち、西において、自然界の戦争とは、熱が不動の物質に加わって生ずる燃える火にはかならないといえよう。かれはつづけて書く、「今地上ニテ此熱度ノ極甚ナル者ハ火ナリ、而シテ火ト云フ者ハ静寂体ノ物質〔が〕、擾動力ノ熱ニ克セラルル〔打ち勝たれる〕ノ戦争ニシテ、〔そのようなはなはだ長期にわたる戦争の結果として、長い長い時間の経過のちについて〕其熱力〔が〕其静寂体ヲ擾動分散シ尽セバ〔すなわち、一方の熱力＝熱の擾動力が、その対立者である静寂体を極限にまで擾動し分散しつくせば〕、即其戦争焔ム。コレヲ灰燼ニナルト謂フノミ」（Ⅲの六一ページ）。この灰燼もじつは物質の存在形態のほずであるが、このことは暫く措くとしよう。とにかく焼尽して灰燼となるというのである。西周は、熱の擾動力と静寂体という対立者の相互関係、すなわち抗争によって物質の運動がしだいに激化し、はてしなく多化し、複雑化してゆき、その極、終局に達する、天工の営みはこれで巨大なワンラウンドの終焉となると考えるのである。

以上をまとめて西周は書く、「故ニ此世界ヲ成ス者ハ〔始動因・起動因 (causa efficiens) としての〕熱ニシテ、其熱ノ一転シタル者即チ名ケテ生活ト謂フ者ナリ、故ニ生活ト云フ者ハ〔質料因 (causa materialis) としての〕

静寂体ト擾動熱トノ戦争ニシテ、其戦争ノ状、万般ニ別レ礦物アリ、植物アリ、而シテ動物ノ中（個々の）人ノ体中ニテモ呱呱ト啼キ始メルヨリ終焉ヲ告ルニ至ルマデ、此静寂体ト擾動熱ト常ニ戦争シテ互ニ相消クス〔互に他者を打消し合う、否定しあう〕。之ヲ人ノ寿命力アルト謂フ。」「故ニ天地万有ハ常ニ戦争中ニ在リテコノ天地万有ヲ為ス者ニシテ、總テ生氣アリ活氣アリ旺盛ナリト謂フ者ハ、知慧ニテモ、世間ニテモ、貿易ニテモ、〔諸国間の〕戦争ニテモ皆此擾動力ノ〔ひきおこす〕戦争中ナリト知ルベシ。』さらに、西周の以上の自然観には、西欧における熱エネルギーの説が何らか常識的に反映しているかもしれないにせよ、これには一言も触れることなく、かえって、かれは、自分の考えは中国でいえば陰陽の説である、という。いわく「支那ノ書ニハ此静寂体ト擾動熱トヲ名ケテ陰陽ト云フ。故ニ『陰陽化シテ万物顕ハルト謂ヘリ。是人ハ戦争ノ中ニ在テ戦争ヲ好ムノミナラズ、此天地ト云フ者ハ畢竟戦争ニテ成立スルモノナリト謂フノ説ニテ』云々（Ⅲの六一ページ）。

* 西周が西欧の近代諸科学を連関づけてまとめた『百学連関』でも、関連する論点としては次のように書くのみである。「Thermology（熱論）、都て熱の働きを論ずるものにして、テルモロジーは英の Heat なり。凡そ世界中万有悉く熱を保ち、冷体なるものと雖も熱を含まざるものはなしとす。熱の働きを顯はす所は expansion（膨張）、fusion（溶解）、vaporization（蒸気）、combustion（焼滅）、thermo-electric current（火より電氣を生ずるなり）等なり。近來格物家の説に、万物悉く熱を以て成り立ちしものなりと言へり（Ⅳの二七三ページ）。「凡そ万有悉く熱に係はらざるはなく、人種、人心の如きも実に熱に係はるものなるべし」（二七五ページ）。

西周のこの自然観ないし哲学思想は、十九世紀七〇年代のものとしては、國際的レベルにおいてはもちろん、あえて取りあげるに値しないかもしれない。わたくしがやや詳しくこれを述べたのは、西欧の哲学と哲学史がわが国に導入されはじめたこの当初の頃——わたくしが『日本近世思想史序説』下巻で、おそらく西洋哲学史についてのわが国最初の簡述として解説した高野長英の遺稿「西洋学師ノ説」から約三十余年のちに——啓蒙

期のこの哲学者がどのような自然観ないし哲学思想を述べたかに留意しておきたかったからである。しかし、むしろ生ずるのは失望である。なお、一、二、三の点を次に指摘しておきたい。

6 戦争的自然・人間観、その二

第一に、西周のこの思想は、西洋哲学史の全体を学んだ者には、ヘラクレイトスおよびその影響を基本的に受けているヘレニズムのストア派の哲学思想を、むしろ多くの相違があるとはいえ、想起させる。ヘラクレイトスはいう、「知らなければいけない、戦いはすべてに共通しており、正義は争いであり、万物は争いと必然の定めによって生ずる、ということをも」。「また、「戦い（*πολεμος*）は万物の父、万物の王である、それは或るものを神々、他のものを人間として示し、或るものを奴隷となし、他のものを自由人とした」（神々と人間、自由人と奴隷との対置に注意されたい、階級的視点の表出）という有名な断片がある。ヘラクレイトスの火は、タレスの水、アナクシメネスの霧（普通、空気といわれる）のように、それ自身運動・変化する始原的な物質であり、「永遠に生きる火」（*πῦρ ἀείωνον*）といわれる。それはたえず万物を生成と消滅、不絶の交替へと導くものである（もちろん、生成と消滅とは、永遠の火以外の相互転化する万物には不可避である）。ヘラクレイトスが火をそれ自身運動・変化する根本物質としたことは古代イオニア的思維の特質を示すが、ここでいわれる戦いとは万物の運動変化をひきおこす矛盾にほかならない。西周がヘラクレイトスの思想（とくに火と万物流転の思想）を知っていたかどうかについては、古来、西洋哲学の展開を古代から説きおこす場合には、この思想は、かれの名とともに通常簡単にも挙げられてきたのであって、博識の西は、哲学史の原書からなにほどかを知っていた可能性がはなは高いと思う。

さらに、西周の焼尽ないし灰燼の思想については、ヘレニズム期のストア派の哲学がただちに想起される。この派では、ヘラクレイトスからの基本的な影響のもとに根本物質は燃える火であり、火の緊張によって世界の収縮と膨脹がおこる。収縮によって世界が形成されるが、やがて逆に膨脹をし、ついに焼尽（*extinction*）によって一切が灰となる。¹⁰近年の研究では、ヘラクレイトスには焼尽の思想はなく、これはストア派の導入したものとされるが、古い伝承（ディオゲネス・ラエルティオスなど）では、両者は混同され、焼尽も灰燼化もともにヘラクレイトスのものとされていた。ともあれ、わたくしは、西周がこの思想の影響を受けている可能性があるのではないかと思う（それとも、火による万物の焼尽の思想に偶然にもかれが考えついたのでらうか）。もちろん、かれ自身いうように、陰陽学説が背後にあるとみることでもできよう。

第二には、西周の思想に体系的な破綻がみられるという点である。「天翁」がいわば絡線（わらくせん）として想定され、その意のもとにおかれる人間の営みは操り人形の動作のようにみえ、そのため、せつかく人類の行手に無疆治休の境が掲げられるものの、そこにいたる過程における人間の実践的な営みの積み重ねという重要な思想がまったく欠落していることは、さきに指摘したが、わたくしがいまみた戦争的自然観においては、一切の戦争の終局、つまり戦争の終熄は寂然不動、別の表現では灰燼なのである。これは実質的・内容的にはほとんど空無に近い。天工はその後また熱という戦争具をもちだして次のラウンドの戦争世界を現出するかもしれない（ストア派では同じように宇宙の周期がくりかえされる）。それでは、人間の未来にくる無疆治休の境は、一箇所では、「彼此地球上ノ共和政治ニ帰シテ無疆ノ治休ト云フ太平ノ休光ニ浴スル」（前出）ものと描かれるが、これはたんに言葉の上でのことにすぎず、哲学体系としては、戦争の終局、したがって万物の運動・変化・発展の終結は「寂然不動」、別の言い換えによれば「瞑頑不霊」の世界とされる。じっさい、かれは次のようにも書いている、「人間ハ戦争ヲ以テ組織シタルガ上ニ、又人ノ性ハ戦争ヲ好ム者ニシテ、凡テ戦争ニ非ザレバ生氣

モナク、活氣モナク、世界上ノ人類ハ寂滅ノ域ニ入ルベキナリ。「終始戦争中ニ在テ生活スル者ニシテ、此戦争ヲ欲セザレバ彼岸ニ渡リ滅度〔迷いの海を越えている状態〕ノ中ニ入ルヨリ外ニ別法ナキ者ナリ。」かれはまたいう、「凡テ吾人ノ住ム此太陽^{かみ}區ト云フ者ハ、畢竟戦争ヲ以テ構造セル者ト知ルベシ」（Ⅲの六〇ページ）と。これによれば、戦争を失えば、その存在と運動は空無なのである。「無疆治休」の境がこのような空無なものあることは、したがって、かれの戦争思想の論理的締結である。西周の説のこの綻びは決して小さなものではない。致命的なものでさえある。これは「天翁」以下無駄で無稽なことを理窟の上で仮設したことに起因するものといえよう。

第三に、しかし、西周がしばしば論を立てるにさいして対立関係を導入していることに注目しておきたい。ここに、かれの弁証法的思惟をあるていどみることができよう。そもそもヘラクレイトスのいう万物に共通する戦争とは矛盾にはかならない。矛盾は悪しきもの、避けるべきものではなく、「正義は争い」なのである。この古代哲学者は自分の思想を、直観的に、聖職者的・典礼文的な文体で語った。後年、壮大な哲学体系を弁証法的思惟によって展開したかのヘーゲルは、ヘラクレイトスの弁証法的思惟について、「かれの命題でわたしの論理学のなかに取り入れなかつたものはひとつもない」と書いている。

これまでわたくしは、以上の所論のなかで西周が対立について述べているとき、注でおりおりそのことを指摘してきた。たとえば、体力と知力とは敵対する面をもちながらも決して相互に損傷するものではなく、かえって相互に助長しあうものとされる。颯風の発生における大気のもつ内外二つの力の衝突、楯円運動（太陽を廻る遊星の運動）における求心力と遠心力（これはじつは、みかけの力）との対立など——もっとも、ここには相互前提があって相互排斥の関係はない——。開化と戦乱についても西は両者を対立しながらも相消滅することなく、相助長するものとして捉えている、など。

わたくしが本稿でたちいらなかつた箇所では、西は「凡ソ天下事ノ生ズル者、(その都度、働き、対立しあう) 両力相合スルニヨリ、①事ノ成ルモ亦両力相適スルニ由リ、②事ノ敗ルル者両力齟齬スルニ由ル。是天下古今ノ道理ナリ」という。例をみるに、①まず夫婦・父子・兄弟間の、相利、相助、さらに社会における彼我有無の貿易、通害(共通の禍害)の相避など、すなわち「夫婦ヨリ以テ社会ノ立ツニ至ルマデ、両(双方)相利スル所アリテ此ノ如キニ至ルハ即チ両力相合シテ成ル者ニ非ザルナシ。」「而シテマタ②会社(社会)一度立ツニ及デハ再ビ両力ニ依テ社会ノ帯結(結び付き)ヲ固クスルコトアリ。①凡テ社会ノ立ツハ両力相合スルヨリ成ル者ナリト雖ドモ、又②一方ニ就テハ(たとえば、河の氾濫や疫病の発生など)所謂通患通害トナル者(が)、又(当の社会内の)他ノ一カト成テ此社会ノ力ト相抵抗シ、(これら二力の抗争の結果)愈社会帯結ノ力ヲ固クスル是ナリ。」「其禍害・通患愈大ナルニ及デハ其社会モ愈大ナラザルヲ得ズシテ、之ヲ避クルノ方法モ愈々厚カラザルヲ得ザルナリ。是即チ苟クモ社会立テハ竟ニ国ヲ建テ、政府ヲ立テ君主ニ帰スルニ統轄ノ権ヲ以テセザルヲ得ザル所以ニシテ、万国共ニ国ヲ立ツルノ真義ハ斯ニ存スルナリ」(Ⅲの四九―五〇ページ)。西はここで国家の成立をこのように説明している。

以上は、西周が二項の対立の視点をもって自然や社会における運動・変化あるいは事態を説明している例である。これらはたしかに弁証法的思惟とはいえるであろう。しかし、ここには、ヘーゲルのような理性的思惟の力強さも、マルクスのような否定性の弁証法、批判的革命的な思惟の威力も、なんらうかがえない。むしろ、いま述べた通患・通害を防阻遮絶するという論は、たんに社会の帯結力に頼るのみでは抗しきれないような「地境ヲ侵害スルノ外寇」、「其国ノ独立権ヲ黷ス寇賊」に軍事力をもって対決することの必要を訴えるのに役立つ。すなわち、兵権なき政府はありえず、「兵備ナキ国ハ国其国ニ非ズ」(Ⅲの五一ページ)との西周の主張を確認する支柱となるのである。

注

- (1) 「兵賦論」のテキストとしては、大久保利謙編『西周全集』第三卷、宗高書房、一九六六年による。ルビや句点は筆者が付した。これからの引用は、本文中、たとえば(Ⅲの四八ページ)としてしるす。
- (2) 拙稿「平和・軍縮のためのたたかいと弁証法」岩崎・フィードラー・ベニーッシュ編『弁証法と現代』法律文化社、一九八九年 (Marxistische Dialektik in Japan, Dietz Verlag, 1987の邦訳) 所収、などを参照。
- (3) 拙稿「ギリシア・ポリス社会の哲学」一九九四年、未来社、一九〇—一ページを参照。
- (4) 西周には「西洋哲学史の講義断片」とよばれる、ごく短い、全集本の左右見開きほどの文章がある。まったくの断片である。かれのオランダ到着以前に書かれたものであろう。麻生義輝の遺著『近世日本哲学史』に「日本に於ける西洋哲学講義の第一声」としてはじめて紹介された(四〇—一ページ)。しかし、わが国では、すでに高野長英の、これに比べればずっと詳しい「西洋学師ノ説」がある(拙著『日本近世思想史序説』新日本出版社、一九九七年、三七五—三九〇ページを参照)。それはともあれ、西のこのきわめて簡単な「講義断片」には、ピュタゴラス、ソフィスト、ソクラテス、プラトン、アリストテレスがあげられているにとどまる。また、明治三年の末から講義をはじめた『百字連環』中「哲学歴史」は十二ページほどで、タレスに始まりヘーゲルに及んでいるが、人名の混乱がみられる。たとえば、レウキッホスの弟子に Democritus と Heraclitus がいたとか、デモクリトスの弟子に Protagoras がいたとか、書いている。西周が、万学に亘ろうとすざるがゆえに、かえって頭脳に無理が生じて、ここでうっかり混乱して書いているのではないか、と思われる(ここでは、火の説とヘラクレイトスとの結びつきが、意識から抜けおちているが、とにかくヘラクレイトスの名がかれの意識にあることを示している)。高野長英には、ギリシア哲学初期のイオニア地方の哲学者としてタレス、アナクシマンドロス、アナクシメネス、アルケラオスの名がみられるが、ヘラクレイトスの名は出ていない。しかし、高野は、ピュタゴラス、アルキュタス、ピロラオス、またエレアの Parmenides、ゼノンの名をあげており、かれがヘラクレイトスやエンペドクレスの名を知っていなかったとは信じがたい。

- (5) 『中庸』第九章「子路問強。子曰、南方之強與、北方之強與」以下。
- (6) 拙著『日本近世思想史序説』上、新日本出版社、一九九七年、一四四―一六、一七二、一九〇―一ページ参照。
- (7) Lucretius, *De rerum natura*, I, 146-264. エピクロスがすでにこの二つの基本原理を掲げている。『エピクロス——解説と手紙——』出隆・岩崎允胤訳、一九六九年、一一―一二ページ。
- (8) Herakleitos, B 53, 80, Diels-Kranz, *Die Fragmente der Vorsokratiker*, 6 Aufl., 1951. 山本光雄訳編『初期ギリシア哲学者断片集』岩波書店、一九五八年、三三―三三ページ、訳文は異なる。
- (9) 注(4)を参照。
- (10) 拙著『ヘレニズム・ローマ期の哲学』未来社、一九九五年、六七―七三ページ。「トノスによる世界の収縮と膨脹、そして焔化・焼尽によって一世代の寿命が終わり、いわば灰となった質料から根源的な火によって世界が新たに再生する」。
- (11) Diog. Laert., IX 7, 8. 『ギリシア哲学者列伝』下、岩波文庫、加来彰俊訳。ἐκτείνωσις / ἐκτερόσσω (burn to ashes, consume utterly).
- (12) Hegel, *Geschichte der Philosophie*, I, S. 344, Glockner, 1959.